

常松大谷遺跡 つねまつおたにいせき & 常松菅田遺跡 つねまつすがたいせき

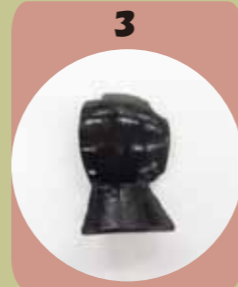


いろいろな形の木製品が 見つかりました。その正体は !?

常松大谷遺跡では、砂で埋まった小規模な奈良時代の谷川から、いろいろな木製品が見つかります。現在、室内でこれらの木製品を丁寧に洗って、その正体を調べる作業をしています。

1は馬形。2は斎串といって、祭祀（マツリ）に使う道具です。では、3・4・5はいったい何でしようか？

3は容器で、外側には黒い漆が塗られています。4は、木を削りぬいて作った容器の破片です。5は、筒状の先端に何かに差し込むような突起（ほぞ）が付いています。しかし、これらはどんな容器なのか、何に差し込むのか、まだよく分かっていません。これからさらに、名探偵〇〇のように推理も働かせ、その正体を突き止めたいと思います。



下坂本清合遺跡 しもさかもとせいごういせき



大(?) 発見は続く!!!

右上の写真は、下坂本清合遺跡で見つかった土器（須恵器）の壺の底の部分です。拡大してみると（右下写真）、墨で漢数字の「六」と書かれていることがわかります。

これは、「墨書土器」と呼ばれるもので、奈良時代から平安時代にかけての土器に多く見られ、人名や職名、地名や土器の用途など書かれる内容はさまざまです。

発掘調査時に見つかった土器の多くは、土が付いたまま取り上げられ、室内で洗浄してはじめてきれいな状態を見ることになるため、洗浄中にもいろいろな発見があります。この墨書土器も洗浄後はじめて文字が書かれていることがわかりました。

現地での発掘調査が終わっても発見は続いています。



平安時代の須恵器の壺の底に「六」と墨で書かれていました（白線部分）。今後この「六」が示す意味について検討していきます。

鳥取西道路の遺跡を掘る!

第58号 2014年2月21日

弥生時代は日本で初めて金属製の道具を使うようになった時代です。

とはいえ、その材料を輸入に頼っていた当時としては、金属製品はおいそれと手に入るものではなかったため、身近な素材でこれを真似したもののもしばしば見られます。



石の武器?

弥生時代の特徴的な遺物の一つに青銅製の剣があります（図1）。こうした銅剣は、弥生時代の初め頃に朝鮮半島産のものが輸入され、北部九州を中心に使われました。そして、日本列島でも同じものをつくるようになると、次第に大きく幅が広がって武器本来の機能がなくなり、マツリに使われるものになったとされています。

写真1は、松原田中遺跡で見つかった遺物で、石を磨いてつくられた「磨製石剣」と呼ばれるもの。弥生時代中頃（約2,200年前）の地面を調査している時に見つかりました。

磨製石剣にもいろいろな種類があるのですが、今回見つかったものは、図1と見比べると一目瞭然、銅剣の形そっくり！マツリに使われはじめたころの銅剣をモデルとしてつくられたものようです。このように写実的に銅剣を真似する石剣は比較的珍しく、現在の研究では近畿地方を中心に、瀬戸内・北陸の一部にしか分布しないことがわかっています。

小さな一片の石の剣。弥生時代の地域交流を考える上で、大きなヒントを秘めた、とても重要な資料といえます。



写真1 磨製石剣

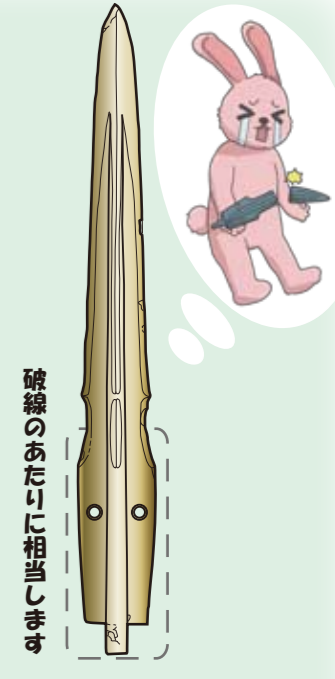


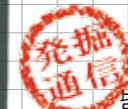
図1 銅剣

材質は頁岩（けつがん）と呼ばれる、薄くはがれる特徴をもつ石です。剣の真ん中でポキリと折れています。石に詳しい調査員が見たところ、どうやら突き刺すような力がかかって折れたのではないかとのこと... 武器として使ったのでしょうか... ちょっと怖いですね

(公財) 鳥取県教育文化財団
調査室

〒680-1133
鳥取市源太 12 番地

TEL : 0857-51-7553
FAX : 0857-51-7550
メールアドレス:
tottori-kyobun@kyobun.
sakuratan.com



今年はどうやら雪が少ないようで、寂しいような助かるような... 皆様いかがお過ごしでしょうか。

1月は「行く」、2月は「逃げる」といいますが、まさにその通り... 屋内での作業も沢山あって調査室のメンバーも大わらわです(´▽`)

来月号は今年度の発掘総集編!! お楽しみに♪

鳥取県教育文化財団 調査室

検索

桂見鍋山遺跡

かつらみなべやまいせき

記録のとり方 ～拓本編～

みなさんは遺跡で出土するものといえば土器や石器などを想像しませんか??なんと遺跡からはお金も出土するのです。今年度の桂見鍋山遺跡の調査では『宣和通寶』(初鑄1119年:北宋時代)と『永樂通寶』(初鑄1408年:明時代)という中国から渡来したお金が出土しました。出土したお金は「拓本」という作業で記録をとります。拓本の手順(右上の写真参考)は、
①お金の上面に画仙紙と呼ばれる薄い紙をかぶせ、水で濡らして文字や文様を浮き出させます。
②画仙紙が乾いたら、綿を布でくるんで作った「タンポ」という道具に墨をつけて①に優しくあて、浮き出ている文字や文様を写し取ります。
こうして拓本をとると、お金の形や文字が実物より見やすくなります!拓本は魚拓とは違い、遺物自体に墨をつけないので遺物を汚すことなく記録をとることができるのです。



～拓本のとり方～



※宣和通寶・永樂通寶ともに渡来銭と呼ばれる中国のお金です。10世紀末頃には日本でお金が造られなくなり、それ以降約600年間は主にこの渡来銭というお金を使っていました。日本が再び独自にお金を造るようになるのは江戸時代になってからのことなのです。

良田中道遺跡

よしだなかみちいせき

ああ～なんてこったい!

今回は縄文時代後期(約4,000年前)の川跡から見つかった石の斧についてご紹介します。この石の斧は表面が滑らかなように丁寧に加工してある「磨製石斧」と呼ばれるものです。堅い緻密な石を探してきて、粗く割って大まかな形を作った後に、砥石にこすりつけて少しずつ表面が滑らかなようにして作っていったのでしょう。人の手で全て行っているのですから、1つの磨製石斧を作るには大変な時間と労力がかかっているはず。

しかし、この磨製石斧は折れてしまって刃の部分しか残っていません。使っている時(木を切っていたのでしょうか?)に折れてしまったのでしょうか。刃が欠けた程度なら研ぎ直せばよいですが、こうなってはもう使えません。

大切にしていた磨製石斧をダメにした縄文人の嘆きの声が、皆さんにも聞こえませんか。「ああ～、なんてこったい。」



川底から磨製石斧が見つかりました。



金沢坂津口遺跡 & 松原田中遺跡

かなざわさかつぐちいせき まつばらたなかいせき

いっぴん逸品ぞくぞく



他の現場に遅れること1月あまり、1月7日に現地での調査を終えることができました。近隣の方をはじめ、さまざまな方のご協力の賜物です。ありがとうございました。

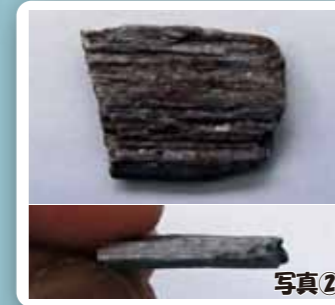
さて、ホッとしたのもつかの間、現在は見つかった遺物の整理を始めています。

現地では小さくて目につかなかったものも、洗ってみると続々と見つかります。今回は、松原田中遺跡から見つかった玉作り製品にスポットをあてて、調査員イチオシの遺物をご紹介します(▽)♪



◀玉の素材(写真①)

緑色のきれいな石(碧玉や緑色凝灰岩)を擦り切り用の石(石鋸)でスジを入れ、薄い板チョコのような形にし、さらにそこに溝をつけて同じ大きさの素材が取れるようにしています。弥生時代の玉作り技術の中でも古いものとされており、鳥取市周辺では珍しいかも。



▲玉作りの道具

石の鋸(写真②)、孔をあける石の針(写真③)など、玉を作った証拠となる道具が見つかりました。完成間近で壊れたような製品もあります(写真④)。

松原田中遺跡 (1区)

まつばらたなかいせき

分銅形土製品～マツリの道具!?～



円板の左右が抉られたこの板状の土製品は、江戸時代以降に使われた秤のおもり(分銅)に似ているので分銅形土製品と呼ばれています。現代では銀行の地図記号がこの形ですね。

分銅形土製品は、弥生時代中期後半から後期前半(2,200～1,900年前)に作られたものです。瀬戸内地方を中心とする西日本各地から1,000点近く見つっていますが、なんと鳥取県からは、岡山県に次いでたくさん出土しているんです。

この遺跡からは、半分に割れて出土し、現状で直径10.8cm、厚さ1.3cm、重さ109g。直径1mmほどの小さな穴を連ねた盾のような二重線が描かれ、人の顔みたく、縁近くも半円状の模様(連弧文)で飾られますが、裏は無文です。

分銅形土製品の多くは、割れて出土します。赤く塗られたものもあります。マツリの際に仮面や護符などとして用いられたという説が有力です。しかし、なぜ割られたのか?、どのように使われたのか?、まだまだ謎が残っています。

